

2020 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

愛と夢と希望に満ちた未来へ

(原文)

陶山 智太郎 (15 歳)

佐賀県

早稲田大学系属早稲田佐賀中学校

2020 年、世界中がコロナウイルスと闘っている。今の僕には何も出来ない。

2030 年にはもうワクチンは出来ているだろう。「10 年前はこんな大変な事があったな。あの時は不安で苦しかったよな」と今のこの世界を懐かしみながら過去のウイルスについて話をしている事だろう。しかし、僕が何も出来ずに STAY HOME をただ守っているだけの間にも、命を懸けてこの未知のウイルスと闘っている人達がいる。防護服を着て闘う医療従事者は 10 年後の僕の理想の姿だ。誰の為ではなく、どこかの誰かの為に命を懸けて働いているだろうか？ 人種や貧富の差ではなく、ひたすらに一つの命と向き合っているだろうか？ 世界中が手を取り合って人類を守ろうとしているだろうか？

2020 年の今は世界中が未曾有の事態となり、誰かが誰かを責めて、神経を尖らせながら生きている。『ソーシャルディスタンス』。新しい言葉を知った。人との距離を保つ事。それがお互いの命を守る事なのだ。10 年後のソーシャルディスタンスは仲間と肩を組んでいたい。笑い、歌い、ソーシャルディスタンスの言葉の価値観を変えていたい。その時僕の横で肩を組み、笑っているのは世界のどこにいる誰だろう。今どこで何をしている人だろう。僕が命を懸けて救った命だろうか。国境なき医師団に入り、世界中の同じ使命感を持った仲間とともにきっと世界中を飛び回っている事だろう。僕の夢はとてつもなく大きい。今の僕からしたら本当に夢の世界だ。でも僕には無理と笑われても諦めきれない夢なのだ。

僕が救いたかった命は祖父だ。まだ小学生だった僕は、祖父が病気と闘いながら、苦しくとも生きようとする姿を見て「助けたい」と強く思った。何度も祖父のベッドの横で、「僕、頑張るからね。見ていてね」と声をかけ続けた。祖父に約束をしたのだ。

僕が生まれた 2005 年。年の漢字は『愛』だ。愛知万博の成功の他に、世界規模で大型ハリケーンや地震、テロが起こり、救済活動は国をまたぎ、世界が助け合った年だった。中学生になった僕は救いたい命が、身近な人から世界中の苦しんでいる誰かに変わった。25 歳の僕はその夢の途中にいる。戦争やテロは無くなり、地球温暖化を防ぎ災害のない世界を目指す為に世界中が、知恵と力を出し合っている。未知のウイルスや解明しきれない病気はまだまだあるが、人類が一つになって闘う限り人間が負ける事はない。あらゆるものに人工知能が使われて、いたる所にロボットがいるが、大丈

夫。そのロボットは、愛がある人間が作った物だから、人間の暮らしを豊かにしてくれている。

2020年のコロナウイルスは世界を大きく変えた。争う事、責める事ではなく手を取り合う事を人間に教えてくれたのだ。そして闘いに勝ち。人は本当の強さと優しさを知ったのだ。

2020年3月の君は今、将来が不安で仕方ないだろう。毎日が辛くて何の為に自分が勉強をしているのか見失いかけているだろう。僕の方では誰かの命を救うなんてどうせ無理だと、悩みを抱えきれなくなって眠れない日もあるだろう。未来の僕なら言える。『君の未来は明るい』という事だ。25歳の君は小学生の頃に憧れたスーパードクターだ。苦しむ人の希望の光だ。君が救う事になる沢山の尊い命がそこにはある。挫けるな。悩んでいる暇はないぞ。ただひたすらに、自分を信じて目の前にある事に取り組まなければいけない。君の心にはいつもお爺ちゃんに誓った決意があるだろう？ それを忘れてはいけない。君の夢を笑う者や無理だと言う奴がいても笑っておけばいい。夢に向かって必死になれる君は最高に強くて最高にカッコイイ。つまり、今の君は最高だ。10年後に気づくはずだよ。2030年には君が夢見た世界と憧れた君の姿、僕が待っているから。